

『六百番歌合』判詞と『源氏物語』古注釈

小 高 道 子

藤原俊成が『六百番歌合』の判詞で「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」と記したことはよく知られている。だが、そこに記された「草の原」の解釈については、必ずしも明確ではない。本稿では、『花鳥余情』『岷江入楚』を中心にして、「草の原」について検討してみたい。

一 「草の原」

『六百番歌合』(冬上) 十三番 枯野」の判詞(以下「俊成判詞」と略す)には次のように記されている。

左勝

(五〇五) 見しあきをなににのこさむくさのはらひとへにかはる野辺の気色に

女房

右

(五〇六) しもがれの野べのあはれを見ぬ人や秋の色にはこころとめけむ

隆信

右方申云、くさのはらききよからず、左方申云、右歌ふるめかし判云、左、なににのこさんくさのはらといへる、えんにこそ侍るめれ、右方人草の原難申之条、尤うたたある事にや、紫式部歌よみの程よりも物かく筆は殊勝なり、そのうへ花宴の巻はことにえんなる物なり 源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり、右、心詞あしくは見えざるにや、但、常の体なるべし、左歌宜し、勝と申すべし

この判詞について伊井春樹氏は次のように解説された。²⁾

俊成は「草の原」のことばの背後に花宴巻を連想し、艶なる内容として受容している。つまり俊成の想念には光源氏と朧月夜による情趣的な場面が展開して感興を催したのであり、それ故に良経の歌は優美なる姿を持っていると高く評価されるにいたったのである。そうすると俊成のようにこの歌を味わおうとすると、源氏

物語の美的情趣を持たなければおおよそ鑑賞できないことになる。

伊井氏は、俊成は「草の原」のことばの背後に花宴巻を連想し、艶なる内容として受容し」たとする。そして「良経の歌」を「優美なる姿を持つていて高く評価」したのは「光源氏と朧月夜による情趣的な場面が展開して感興を催した」という。すると俊成判詞は、「草の原」を含む『源氏物語』の和歌ではなく、「草の原」という「ことばの背後に花宴巻を連想」することにより「艶なる内容として受容」したことになる。この伊井氏の解釈は現代の『源氏物語』解釈に継承され、例えば小学館の『新日本古典文学全集』（以下『全集』と略す）の注は、花宴巻を「光源氏と朧月夜による情趣的な場面」が描かれた巻として解釈している。

「草の原」の語は朧月夜の和歌「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと思ふ」に見られる。『全集』はこの和歌について次のように記している。

私がこの世から消えたとしたら、あなたは私の名を知らぬからとて、「草の原」（死後の魂のありか）を尋ねないつもりか、と問う歌。源氏が執拗に名を問うのに応じた歌だが、贈答歌としては、異例にも女の方から詠みかけた贈歌。男に心を傾けてしまった女の、相手の情愛を確かめようとする表現。

源氏に心ひかれる気持が、優艶な表情として表れ出る趣

それでは俊成は朧月夜が詠んだ和歌ではなく「草の原」のことばの背後に花宴巻を連想し、艶なる内容として受容したのであろうか。ここで俊成判詞を再検討してみたい。俊成が「尤うたたある事にや」と右方人を批判したのは、右方人が「くさのほらききよからず」と「草の原」の語を難じた事に対してであろう。俊成は「くさのほらききよからず」とした右方人に対してまず「なににのこさんくさのほらといへる、えんにこそ待るめれ」と記している。「右方人草の原難申之条、尤うたたある事にや」と「右方人」を批判したのは「草の原難申之条」すなわち「草の原」という言葉を「ききよからず」と「難」じたことによるのであろう。この和歌について、『岷江入楚』は「弄花抄」「箋」(二条西実枝説)として次のように記す。

弄 此ま、はかなく消なは草の原までも尋給へき事なるに名のりし給へとあるはなのらすはたつね給ましきにやとかこちたる哥也
秘 同

箋曰 しきりに名を尋らるゝにて志のふか、らぬはしられたる也
其ゆへは真実の志ならはなき跡までも尋らるへき也 今にかきるへきことかはと也 名答の作者也 なのらすは尋給ましきかと恨たる也河 弄秘箋大略同じ義也

「男に心を傾けてしまった女の、相手の情愛を確かめようとする表現」「源氏に心ひかれる気持が、優艶な表情として表れ出る趣」とする『全集』とは異なり、しきりに名を尋ねる源氏に対して、「しきりに名

を尋らるゝにて志のふかゝらぬはしられたる」と、源氏の情愛が深くないからこそ源氏が名を尋ねるのであると隴月夜の和歌を解釈している。そしてこの隴月夜について「名答の作者也」と記している。そして「河 弄秘箋大略同し義也」と記している。すなわち、『岷江入楚』はこの和歌を、しきりに名を尋ねる源氏に対して、名を尋ねるのは源氏の志が深くないからであることを指摘した名答と評価している。そしてさらに『河海抄』『弄花抄』『秘』（三条西公条説）「箋」（三条西実枝説）が同様の指摘をしていると記している。

この和歌は、「光源氏と隴月夜による情趣的な場面が展開して感興を催した」ことではなく、「名答」というべき隴月夜の和歌の詠み方自体が「艶」であるというのであろう。

二 「なににのこさん草の原」

この俊成判詞について渡部泰明氏は、「何に残さむ」に注目して次のように記された。³⁾

ここで注目したいのは、「草の原」とともに艶だとされている「なにに残さむ」の方である。『源氏物語』由来の「草の原」は、この「なにに残さむ」と結び合わされることで「艶」と呼ぶにふさわしい内実を得た、と考えるのが自然であろう。

「なににのこさんくさのはらといへる、えんにこそ侍るめれ」という

一文において、「なにに残さむ」は、「草の原」とともに艶だとされているのであろうか。「草の原」の語は隴月夜が詠んだ和歌に出てくるが、「何に残さむ」は、花宴巻には見られない。『源氏物語』由来の「草の原」が、『源氏物語』の同じ所には見られない「なにに残さむ」と結び合わされることで「艶」と呼ぶにふさわしい内実を得た」のであれば、俊成はどうして「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」と記して「草の原」の語を難じた右方人を非難したのであろうか。

三 「よにしらぬ心ちこそすれ有明の」

月の行衛を空にまかへて」

俊成判詞にある「源氏みさらん哥よみは無念の事といへり」「又花宴巻はことにすくれて艶なる巻なりとも申給へり」について、『花鳥余情』は、この和歌についての注釈で記している。こうした『花鳥余情』の解釈は、三条西家で継承されている。『岷江入楚』はこの和歌の注で次のように記す

秘 源の哥の中にも秀逸也 五文字殊更妙也云々 花鳥に色くあり 其評面白し 箋秘ノ義ヲ註ス略之
箋曰 明はて、よりは有明の月の行衛はいつくともしられざる也 まかへてとは行衛をうしなひたる心也 世にしらぬは忙然と是非をわきまへぬ心也 面は月をしたふ義也 下の心は隴月夜誰ともしらす其人ともわかぬはたとへは有明の月の行衛なきかことく也

此世にしらぬはかならずしも世の字の心にては有るましきやうに申されし よに逢坂の関はゆるさしの哥のたくひにそ申されし

花 吉水僧正の哥 有明の月の行衛をなかめてそ野寺のかねは聞へかりける 此哥をとりてよみ侍る也 源氏をは詞をも哥をもと

りてよむへき也 俊成卿も源氏みさらん哥よみは無念の事といへり 又花宴巻はことにすくれて艶なる巻なりとも申給へり

「秘」は、この和歌が「源の哥の中にも秀逸」であり、特に「五文字殊更妙也」という。「花鳥に色くあり 其評面白し」と記しているから、この項目の末尾に記した『花鳥余情』の記事は、「秘」から引用したのではなく、『花鳥余情』についての「秘」の記事をもとに、改めて確認して引用したものと推定される。そして、『花鳥余情』と比較すると、この和歌について『岷江入楚』は『花鳥余情』をそのまま引用していることがわかる。すると、この和歌について「源の哥の中にも秀逸也 五文字殊更妙也云々」とするのは「秘」すなわち公条説であり、吉水僧正すなわち慈円がこの和歌をとって詠んだ和歌を引き、「源氏をは詞をも哥をもとりてよむへき也 俊成卿も源氏みさらん哥よみは無念の事といへり 又花宴巻はことにすくれて艶なる巻なりとも申給へり」とする部分は『花鳥余情』で指摘された説を継承したことになる。

四 「心いるかたならませは弓はりの

月なき空にまよはましやは」

『岷江入楚』

花 比はやよひの廿日あまりなればやうく弓はりの月になる比也 まよふといふは心にいらぬ故にこそあれと源の哥の中の五文字にかゝりたる返哥也 弄同

秘 ふかく心に入たる事ならばたつねまとはさらましと也 前の哥のまどふ月といふにかゝりたる返哥也 臚は天性哥よみ也 弄同

箋曰 真実心にいる事ならばたとる義は有ましき也 源のまどふ哉とあるをとかめてまどふとアルハうはの空なる心からと也 比は廿日あまり下弦の月也

『花鳥余情』をはじめとする古注釈を検討すると、古注釈においては『源氏物語』を俊成判詞に基づいて解釈しようとしていることがわかる。中世の歌人歌学者は、『源氏物語』の表現を検討し、理解することにより、和歌を詠むための基盤にしようとしていたのである。そのため俊成は『源氏物語』の表現を知らない歌人を「源氏みざる哥よみは遺恨の事なり」と記したのであろう。俊成判詞は、『源氏物語』・中世歌学の両面から検討する必要がある。

注

- (1) 『六百番歌合』の引用は新編国歌大観、『源氏物語』の引用は新編日本古典文学全集、『岷江入楚』の引用は源氏物語古註釈叢刊による。
- (2) 『源氏物語注釈史の研究』(一九八〇年 桜楓社)
- (3) 「文治・建久期の歌壇」(『新古今集とその時代』一九九一年 風間書房)